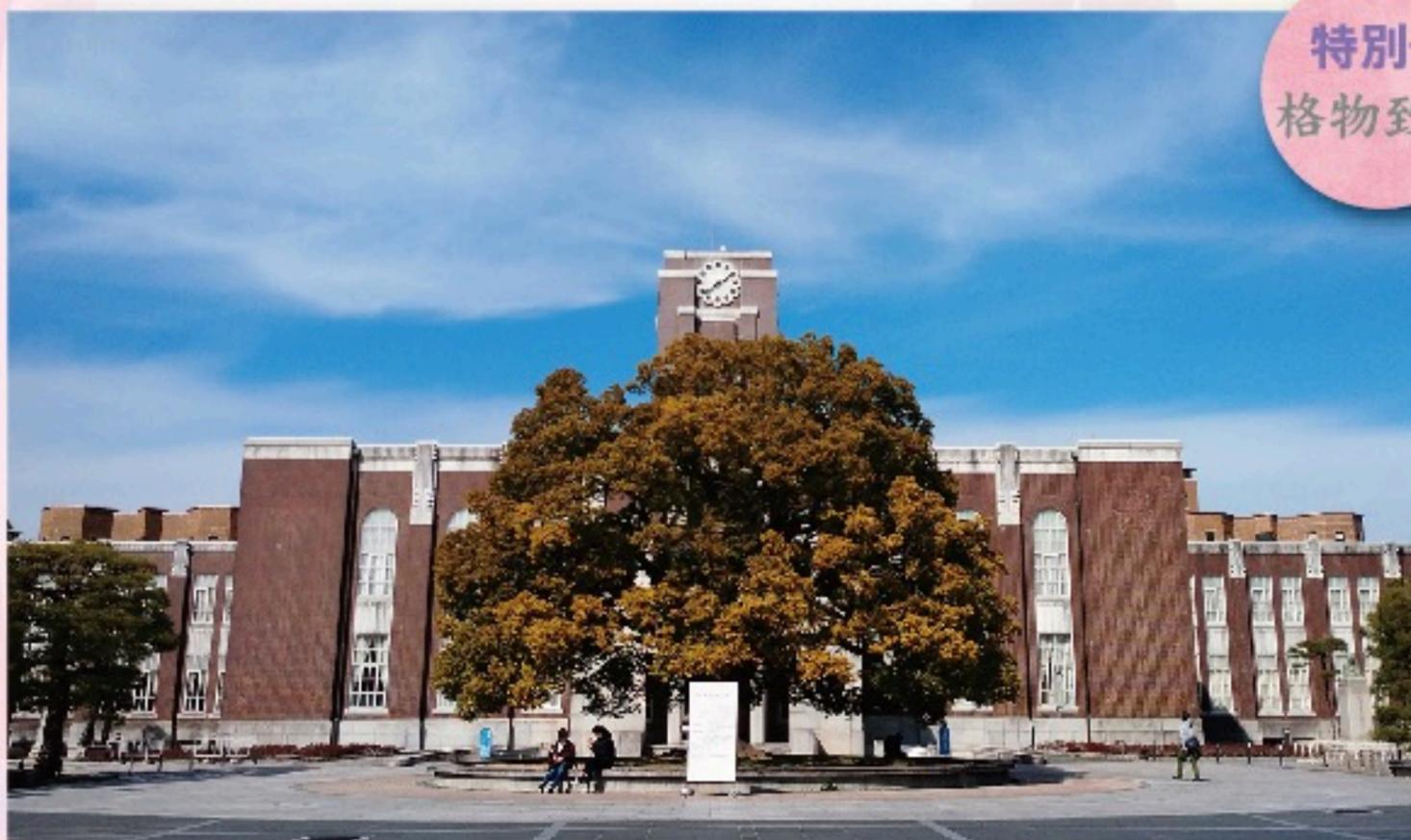


特別号  
格物致知



2021年2月25日 一般選抜試験初日の時計台と空

## 定年退職者のみなさまへ贈る言葉

京都大学生協同組合理事長 若林 靖永

皆様におかれましては、永年にわたる京都大学でのご勤務、大変お疲れ様でございました。また、京都大学生協の運営への多大なるご協力についてありがとうございました。

定年を迎えられるにあたり、一言贈る言葉を述べさせていただきます。

京都大学生協は、食堂や書籍のみならずパソコンなどの勉強研究機器や共済、学生の学びを支援する事業にも力をいれるようになり、学生が参加する企画やイベントも多く取り組まれるようになりました。また、教職員委員会を通じて、教職員組合員の参加により、教職員組合員のための活動をすすめてきました。これらも、みなさんのご理解、ご協力によるものであり、組合員の組織である生協を支えていただきうれしく思います。

今年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の広がりによって4月は一斉休講となり、5月から全面的にオンライン授業になり、後期になっても一部授業のみ対面で多くの授業はオンライン授業となりました。その結果、大学生協の事業利用は激減し、生協の経営状況はかつてない困難な状況を迎えています。事業の見直し、職員の削減など、経営を再建する取り組みをすすめるとともに、学生委員会と新学期活動をしっかり展開できるよう準備をすすめています。ぜひ今後の京大生協を機会がありましたら引き続き応援していただきたいと願っています。

コロナ禍は私たちの世界に脅威をもたらしていますが、同時に社会変革の機会ともなるでしょう。コロナ後よりすばらしい世界をつくっていくためにも、皆様がたが、今後とも健康で、ご活躍、ご挑戦していただき、新たな未来を築くことを期待しております。

西部会館ルネ (外線) 752-1587 (内線) 7632	吉田ショップ 752-1587	北部購買 753-7633 7633	南部生協会館 752-1586 7635	時計台生協ショップ・時計台旅行センター 753-7630 771-6289 7630 7639	宇治生協会館 0774-38-4388 17-4388	桂ショップ 383-7300 15-7300
ブックセンタールネ 771-7336 7631	洋書 751-6183 7631	PCセンタールネ 753-7636 7636	コンベンション サービスセンター 753-7655 7655			

# 京大生協：思い出される3つの場所

川添 信介

2020年9月に定年まで半年を残して京大を退職した。1973年に京大文学部に入学してから、留学期間と大阪市立大学で仕事をしていた13年ほどを除いて、これまでずっと京大生協のお世話になってきた。はからずも新型コロナウイルスの蔓延する中で退職することになり、当たり前だと思っていた大学での生活と仕事が実は不安定さを抱えたものであり、幸運に支えられていたことを知ることになったが、京大生協も危機的な状況を迎えていると聞く。そのような中で何か京大在任中の「思い出」を書いてくれというご依頼を受け、最初はそんな「呑気なことをやっている場合だろうか」とも感じたのだが、これも「組合員のつながり」をまず第一に考える生協らしいあり方だと思いお引き受けした。



九州の小さな地方都市で高校までを過ごして京大に入学し最初の強烈な記憶となっているのは、何といても時計台の地下にあった書籍部である。現在の美しく改修されている前の時計台法経1番大教室の下に潜るようにして、バリアフリーなどまったく考えられていない段差を超え、理髪店の横を通って入った書籍部には、実に頻繁に通っていた。高校の時から地元の書店によく出入りはしていたが、大学もない地方の書店には岩波文庫でさえまとめて眺めることのできる棚はなかった。ましてや学術書と言えるような品揃えをしている店はなかった。そのような私に時計台書籍部は「大学とはこういうものなのだ」ということを教えてくれたのである。

もちろん大学の図書館にも通って学問の厚みにも触れたが、新刊書が放つ生き生きとした学術の香りは別の刺激を与えてくれた。現在のルネの書籍コーナーよりずっと狭かったはずだが、当時の私には何か無限の広がりをもった空間に感じられたのを思い出す。

京大で長い間過ごしたとはいえ、実際に過ごしていたのは吉田キャンパス、それもほとんど文学部の周辺だけだった。当然、食生活の中心は中央食堂だった。歴史を繙くと中央食堂が8号館地下に開設されたのは1972年とのことなので、73年に入学した私は最も長く中央食堂の恩恵を受けてきた一人かもしれない。ただ、中央食堂では昼食や夕食も食べたはずだが、申し訳ないことにどんなものを頂戴したのかにははっきりした記憶がない。映像的にもはっきりと覚えているのは、喫茶部での時間である。学生時代の中央食堂には、北側のスロープを降りてゆくとコーヒーや軽食が提供されている空間が一般の食堂から区切られていた。そこで授業が終わった後など、時間があるときに友人たちとおしゃべりしていたことが、いわば私の「青春の思い出」なのである。

当時の京大文学部にも専門ごとの研究室が存在したが、そこは院生ら先輩たちの縄張り学部生には敷居が高く気楽に入り込めるようなものではなかった（と、少なくとも当時は感じていた）。進々堂など学外の喫茶店に行くこともあったが、何といても安くコーヒーが飲め、近くの中央食堂が一番のたまり場だった。現在のようにスマホやSNSなど夢想だにできなかった私たち文学部の学生にとって貴重な交流の空間として機能していたと思う。

後年2012年に中央食堂が改修されたおりに（あるいはその少し前だったか）、この喫茶空間は廃止されることになった。ほぼ同時期に北部生協会館2階の喫茶もなくなったかと思う。世の中全体で学生生活と強く結びついていた喫茶店文化が失われたことの余



波であり、当時京大生協理事長でもあった私は、経営上の観点からは喫茶の廃止は仕方のないことだと思っていたが、それでも一抹の寂しさを覚えたことを記憶している。すばらしいカンフォーラが存続しているのは嬉しいことであるにしても、なかなかうまく説明できないのだが、中央食堂喫茶部はカンフォーラとはまったく別種の空間だったとの思いは強い。

京大生協の思い出の場所の3番目は、吉田食堂2階の会議室である。2007年に当時の平専務に頼まれて副理事長を、その後2009年から2014年まで中森専務、中島専務のもとで理事長を務めさせていただいた。学生時代とはちがい、上に書いたような中央食堂、ルネ、北部の改修、京大との相互協力関係に関する協定書など様々なことがあり、花谷会館をはじめとして生協の様々な場所の記憶と結びついている。しかし、まず脳裏に思い浮かぶのは、常任理事会の主な会場となっていた吉田食堂2階なのである。

そして、この場所と強く結びついているのは学生理事の諸君、学生委員会の諸君の顔である。常任理事会で何が行われているのかは、生協に深く関わっていても知らない方が多いと思うが、京大生協に関わるあらゆることがら、実質的に議論される場であったと言えるであろう。当然、事業体としての経営に関わるものが、これはどうしても生協職員が中心となって議論される。同時に、学生諸君が主体となって考える新入生歓迎や定例的なイベントや食堂での企画などについても、常任理事会に提案されるのである。

常任理事会で学生諸君が自分たちの企画を提案するとき、とても緊張しているのがよく分かった。まだ京大に入りたてに近い若い学生諸君が、いい大人たちを前にして企画の目的や内容を説明するのは大変気の重いことだったに違いない。とりわけ、優しい生協職員のみなさんとは違って、教員でもある私は（多分、現理事長の若林さんや今は京大の情報環境機構長である喜多さんなども）、学生諸君を目の前にすると、つい教師の悪癖が抜けず、かなり厳しい指摘をすることになる。そのような評判がたつと、学生諸君の側はますます緊張を強いられることになったようである。

しかし、学生諸君にしてみれば知ったことではないかもしれないが、この会議室が私の記憶に残っているのは、学生諸君がこのような経験を経て「成長する」姿をひしひしと感ずることができたという喜びのためである。それは教室で自分の専門の学生の成長を見るのとは違って、「人間としての」成長を知ることができた喜びなのである。もちろん、学生諸君から教えられることも多かったし、学生と「大人」との区別を超えて、お互いに成長し合うという経験は、生協ならではのものだったと思っている。

京大生協の思い出は尽きないが、これくらいにしておこう。退職はしたが、私は今も京大生協の組合員を継続させてもらっている。大学生協にとってコロナ禍は大きな変化・革新を迫るものとなるかもしれないが、京大生協が京大生と京大にとって不可欠の組織であることには何の変わりもないだろうと信じている。組合員の一人として今後も京大生協を利用しつつ、応援したいと思っている。しかし、とりあえずは「これまでありがとうございました」と申し上げておきたいと思う。



カット：浅野 純子

# 私の43年の大学生活

京都大学地球環境学堂 教授  
藤井 滋穂

京都大学生協同組合（以後、生協）には、1978年4月の京都大学（以後、京大）工学部衛生工学科入学以来、43年間お世話になりました。当時18才の自分には、43年はほとんど想像がつかない長い時間とと思っていましたが、今となれば川の流れるようになつという間に過ぎたと感じています。また2013年度は生協理事、2014年度から5年間は副理事長を務めさせていただきました。なお1991年8月から1993年8月はタイのアジア工科大学（AIT）に、1993年9月から1998年3月までは立命館大学理工学部勤務し、それ以外が京大生協にお世話になった期間です。

京大生協とは、個人的な利用以外では、大学助手（1980～1991年）の期間に特にお世話になりました。いまでも覚えていることでは、年度末の経理締のため、生協で買い物をし、残額をゼロとする作業をしていたことです。当時は、会計ごとに正確に0円とする必要があり、そのため生協でも1円商品（クリップ1個）が用意されていました。科学研究費の場合、この会計は配分予算だけでなく、その利子分（京大本部が科研費をまとめて定期預金とし、その分配額）に対しても0円とするよう要請されていました。その後、その利子分を本体と合算して0円とすることが許されるようになり、さらにその後は金利の低下で利子そのものもなくなりました。これらは消費税導入以前の話です。大きな時代の変化といえるでしょう。日本の物価は1990年以降ほとんど変化していませんが、それまでの私の育った時代はインフレが当然の現象と理解し、10年の定額貯金をすれば倍増することが常識としてとらえられていました。今の学生には信じられない世界と思います。

京大入学の1978年から定年退職の2021年までの43年間、一貫して大学で過ごしてきましたが、1991年からの2年間はタイのアジア工科大学AITで、1993年からの4年半は立命館大学で働き、短いながら私にとって貴重な経験となりました。

AITは、日本を含めた海外諸国からの援助で運営される国際機関で、JICA専門家として派遣されました。学生は、アジアを中心とする留学生で、タイ人が多いとはいえ3割以下でした。援助国の大使等からなる評議会（Board of trustees）が学長選出を含め大学の運営を決め、教員は各国から派遣されています。この生活の中で海外の話にたくさん間違いがあることに気づきました。

たとえば、「日本人はNOと言わない」、否定しない文化とよく言われます。しかし、AITの会議で反対意見がある場合、日本人教員はまずNOと発言し、その後理由を説明する形を取りますが、欧米系教員は、提案を褒め、その後やんわりと問題点を示唆し、最終的に全面否定する形が多かったと記憶します。語学力に劣る日本人は、誤解を避けるため、はっきり意見を明示するためです。これは国際機関では一般的だと思います。

別の例では根回しが上げられます。識者の中には、根回しは日本の独自の習慣であり、議論は正式な会議上ですべきで、非公式な会談等は問題だと解説する人がいます。しかしAITだけでなく、その後の海外関係の仕事を通して、いかに事前交渉が大事かをつくづく経験しました。

また、海外学生との交渉についてもAITで学びました。日本人学生は村度して無理な要求はしないのが一般的ですが、留学生の中にはダメ元で無理な要求をする学生がいます。その場合、留学生の対応に戸惑いそれを許してしまう先生もいます。しかし、私は明確に拒否するとともに、場合によっては“not comfortable”と返事をします。そうするとそれ以降の無理な要求はなくなります。

一方、立命館大学では、大学が経営組織であることを学びました。立命館大学が、琵琶湖草津キャンパスに創設する新学科・環境システム工学科に関わる人事で転職し、新設前の衣笠キャンパス半年間と新学科創設後の4年間に助教授としてお世話になりました。立命館大学は、もともと最もリベラルな大学でその理念にこだわっていました。しかし、私が着任する数年前には、理念とは裏腹に学生人気が大きく低下し、大学の存亡に関わるとの危機意識が大学全体で共有されるようになりました。その結果、私が働いていた時期は、日本で最も積極的な経営の大学へと反転攻勢をかけていました。その例が、琵琶湖草津キャンパスをはじめとする多数の新学部・新キャンパスの展開、アジア太平洋立命館大学の創設、AO入試やセンター試験入試などの新しい入試システムの導入の試みなどです。大学の本質は教育ですが、それを支える原則は経営であり、それをいろいろな場面で学ぶとともに、その後の大学業務で生かすことになりました。

AITと立命館とも、教員と職員、大学執行部と一般教員との距離が近く、それが大学の活性化に大きく役立っていると感じました。AITでは、着任や離任、さらにはプライベートなことでも、同僚教員や事務秘書からいろいろ歓迎されました（写真参考）。また、所帯が小さいこともあり、離任・着任時の会には学長が同席し、スピーチをもらいました。立命館では助教授でしたが、学内の方針に関わる委員会にも出席しました。たとえば立命館アジア太平洋大学の設置方針を決める重要な会議にも委員として参画し、積極的に意見を言わせていただきました。これに比べ、京大では教授になっても、本部のことがなかなか分からないのが実情です。私が地球環境学堂長であった際は、出来るだけ部局長会議や研究教育評議会の情報を流すとともに、総長や理事との打合せ（ブリーフィング）の際には、若手の助教の先生らにも同席してもらい、本部との距離を縮めるように努めました。



タイ・ドンムアン空港でのAIT関係者による見送り  
（左から4人目が筆者、1993.8）

いずれにしろ、この43年間いろいろな場面で多数の人に支えられ、ここに無事に定年を迎えることを感謝して本稿の最後を締めたいと思います。



カット：浅野 純子



カット：浅野 純子

# これまで、現状、そして今後への期待

理学研究科 生物科学専攻 教授  
平野 丈夫

## 研究について

私は東京育ちですが、すでに京都で30年以上暮らしています。京都大学では最初は医学部に助教授として採用され、1997年から理学研究科・理学部の教授を務めてきました。私は学生の頃から自分自身の心とか意識に興味があり、その物質的基盤となる脳のはたらきについて研究したいと思っていました。そして、学習や記憶の神経細胞レベルでの基盤となる、神経細胞間での情報伝達を担うシナプスが変化する現象について、その分子・細胞レベルのメカニズムと、そうしたシナプス変化が動物の行動にどのような影響を及ぼすかという点について、実験研究を行ってきました。そうした研究に多くの大学院生・教員が参加してくれ、楽しい日々を過ごすことができました。実験で新たなことが分かること、新しい考えや見方が得られること、実験手法を工夫する過程で様々な問題を解決することは、私に大きな喜びを与えてくれました。

## 大学について

理学研究科では研究教育に加えて、副研究科長・評議員・研究科長として部局の運営にも携わりました。そして、部局および大学の有り様とあるべき姿についていろいろと考えました。私は、多様な構成員が情報と意見交換・交流を行うことにより、各人が異なる観点・広い視野・新たなアイデアを得て活躍の場を広げていくのが、大学のあるべき姿ではないかと考えています。大学は良き出会いと交流の場として大きな価値があると思うのです。

## 新型コロナウイルス感染対応について

しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大は、大学における人と人との交流の大きな障害となってしまいました。オンライン講義、テレワーク、オンライン会議等が様々な工夫をしながら行われてきました。それらにも各々の良さがあり、またそれらの実施により、以前の業務の改善につながる気づきもあったように思います。しかしながら、対面での交流や現場での体験の縮小による悪影響はやはり看過できないように感じています。2020年度の後期には、オンラインでは実施が難しい実習と少人数のセミナーを対面で行いましたが、今回は出席率が例年と比較してとても高かったことが印象に残っています。学生の皆さんもリアルな体験や交流を強く望んでいたのだという思いを新たにしたいです。

## 理学研究科について



2016年に行った研究室20周年記念会の写真  
(琵琶湖クルーズ船ミシガン内)。  
前列中央の紺色のシャツを着ているのが筆者。

部局の運営に話を戻します。理学研究科には、かなり率直に意見を述べられる教員等が多く、議論が白熱するようなことが幾度もあったと記憶しています。私もそのうちの一人のような気はしますが、研究科には空気を読まない方がそれなりにいらっしゃるように思います。私自身は、納得のいかない空気に流されないようにして、より良い対応を模索するというつもりでおりまして、率直な意見交換は望むところだとも考えていました。理学研究科には独自の特徴をもつ5専攻があり、また実験・理論・フィールドワークといった異なる研究教育手法を用いる教員が在籍し、各々の方が異なる日常を過ごし、何をより重視するかも異なっていると思います。ただし、理学研究科においては、事実をしっかりと提示した上で理詰め議論を展開すれば、道理が通ることを信じていくことができたことは、大変ありがたかったと思っています。そ

して、それがあったからこそ、率直な意見交換を行えたのだと考えています。

## 京都大学への期待

現在私たちは、不正確な情報が氾濫し、またSNSやWebで各人の関心事項やその人の思いに沿った偏った情報が過度に提供されかねない状況下に置かれていると感じます。そのような状況だからこそ、様々な情報を集めた上で事実を見極めて整理し、その上で適切な判断をくだせるような人を世に送り出し続けることが重用だと思えます。そして、京都大学はそういう人を育てることに大きな貢献をできるはずだと考えております。



カット：浅野 純子

## 定年退職を迎えられる教職員の皆様へ

京都大学生協同組合 専務理事 國見 伸行

2021年春に定年退職をお迎えになられる教職員組合員の皆様、長きにわたる京都大学でのお勤めお疲れ様でした。また、長らく京大生協をご利用いただき、生協運営にご理解・ご協力を頂戴しましたことに心より感謝申し上げます。

今日の京都大学生協同組合は、1949年（昭和24年）5月25日に、戦後3つあった京大の福利厚生組織（大学職員厚生会、職員組合厚生部、学生協同組合）が一つとなって誕生しました。その歴史からもお判りいただけますように、教職員の福利厚生の改善が誕生の一つの契機であり、学生協同組合を構成する学生の皆さんも含めた京都大学の構成員の福利厚生を支えることをミッションとしてこれまで事業活動を進めてまいりました。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大によって、大学の風景は一変いたしました。学内から人が消え、コミュニティ形成が危機に陥りました。学生はオンラインでの講義が主体となり、教職員のみなさまもオンライン講義、在宅ワークなど大変なご苦勞があったと思えます。人と人とのつながりで運営される生協も経営の危機に直面しております。教職員の先輩のみなさまが守り育ててきた京大生協の灯を消さないためにあらゆる努力が必要となっております。

After（With）コロナの時代では、生協の商品供給やサービス提供にとどまらない教職員の憩い・つながり・コミュニケーションの場としての役割は、なお一層重要なものになっていくのではないかと考えております。諸事多忙な教職員の皆様に役立つ「やわらかい」生協、「居心地の良い」生協になるよう今後の生協運営を進めてまいりたいと思えます。

あらためまして、これまでのご利用に感謝申し上げますとともに、これからも温かい眼差しで京大生協をお見守りいただきますようお願い申し上げます。ご自愛いただき、ますます健康にご活躍されますことをご祈念申し上げます。

ありがとうございました。



カット：浅野 純子

# 京大での思い出

京都大学野生動物研究センター 教授  
幸島 司郎

京大には1974年に理学部に入学してから、学部生として6年、大学院生として5年、研究員や研修員（オーバードクター）として5年、計16年在籍したほか、2008年からは野生動物研究センターの教授として、さらに12年お世話になった。つまり、途中、東京工業大学で過ごした18年間をのぞけば、28年間も京大で過ごしてきたことになる。しかし、長い京大での暮らしの中でも、とりわけ思い出深いのは、何と云っても、めいっぱい自由に研究させてもらっていた大学院生時代や「フリーサイエンティスト」と自称していた無職時代のことである。

もともと、私が京大理学部に入ったのは、アフリカでゴリラやチンパンジーを研究するためだった。だから入学するとすぐに山岳部に入部した。フィールドワークには山登りの技術が必要だと思ったからだ。しかし、すぐに山登りにのめり込んでしまい、勉強もしなかったのも、気がついてみると、当時花形だったゴリラやチンパンジーの研究ができる大学院には、とても進学できそうになくなっていった。そんな時に会ったのが、日本の動物行動学の創始者ともいえる日高敏隆先生だ。課題研究（卒業研究）の指導をお願いすると「そんなに山が好きなら、山でできる研究をすればいい。山で何か一つ不思議なことを見つけて、それを研究しなさい」とアドバイスしてくださった。こうして私が見つけた不思議が、セッケイカワゲラなどの真冬の雪の上で活動する昆虫たちだった。

大学院受験に2回失敗したおかげで、通常は半年だけの課題研究を3年間かけてじっくりやることができた。その結果、この虫たちが低温や雪山の環境にみごとに適応していることがわかってきた。それで、まだ誰も気づいていないだけで、実は「氷河にも虫がいるのでは？」と妄想するようになり、大学院では虫を探すために氷河に行くことにした。そして運良く、ヒマラヤとパタゴニアの氷河で、探していた昆虫を発見し、それまで無生物的世界とされてきた氷河にも生態系があることを初めて明らかにすることができた。その後も、世界各地の氷河生態系を研究して、30歳の時に氷河生態系の研究で博士の学位を取得した。

しかし学位はとったものの、35歳で東京工業大学の一般教育の基礎生物学担当教員に採用されるまでは、定職につくことができず、アルバイトで妻子を養う苦しい生活が続いた。そんなころ紹介されたのが「アマゾンで木登りするアルバイト」だ。フランスの植物学者による世界で初めての熱気球を使った熱帯雨林調査に参加したのだ。大阪で開催される花と緑の博覧会用に記録映画を作るのに、日本人が1人もいないのはまずいので、アマゾンで木登りできる日本人研究者を探していたそうだった。暑いところは苦手だったが、面白そうでバイト代も良いので引き受けた。そしてこれが、20数年後に私がアマゾンでプロジェクトを始めるきっかけともなった。

アマゾンから帰った直後に東京工業大学に採用され、東京での生活が始まった。東工大にはその後18年間もお世話になった。東京でも氷河生態系の研究は続けたが、東工大生なのに生物の研究がしたいという変わった学生たちと一緒に、「イルカの眠りかた」、「白目があるのはヒトだけか?」、「ヒトがすれ違う時の行動の男女差」、「成長によるオランウータンの顔の変化」、「ネオンテトラはなぜ派手か?」、「サイはなぜフンを蹴るのか?」、「植物行動学」、「微生物行動学」等々、ユニークで変わった研究をたくさんしてきた。これらは全て、それぞれの学生が見つけた不思議をいっしょに追求した結果だ。

2008年に京大に異動したのは、世界の野生動物の保全研究のために新たに設立した野生動物研究センターに来ないかと誘われたからだ。京大には霊長類学者はたくさんいたが、イルカなど、それ以外の大型野生動物の研究者があまりいなかったのだ。氷

河生態系の研究も続けることを条件に、お引き受けした。ところが、京都に来てからは、各種のイルカやアザラシ、オオカミ、ボルネオのヤマアラシやジャコウネコやカワウソ、マレーバク、インドのアジアゾウやドール、アマゾンのカワイルカやマナティーなどを研究する「貴重だが、ちょっと変わった」大学院生たちの世話が忙しくて、あまり氷河には行けなくなってしまった。特に、アマゾンの野生動物保全プロジェクト（「フィールドミュージアム」構想によるアマゾンの生物多様性保全：JST/JICA SATREPS；2013年－2019年）を始めからは特に忙しく、アマゾンだけでも毎年4－5回通っていたので、氷河には全く行けなくなってしまった。しかし、彼らのおかげで、氷河から熱帯雨林、ヒマラヤから海中に至るさまざまな生物の不思議を研究することができた。生物学者としてこんなに幸せなことはない。



ふりかえてみると、私がこんなに楽しく充実した研究者人生を送れたのは、若いころに京大で、めいっぱい自由にのびのびと研究させてもらったおかげだと感謝している。京大にいるころは、学生や若手研究者が自分のやりたい研究を自由にやるのはあたりまえだと思っていた。しかし、京都を離れてみると、それがあたりまえでないことを何度も思い知らされた。利益に直結する「役に立つ」研究ばかりがもてはやされる、昨今の世知辛い状況では、ますます難しくなっているが、京大には、これからも学生や若手研究者が自由にのびのびと研究できる場であって欲しいと願っている。



カット：日高喜久子

# 京都大学の思い出

理学研究科 生物科学専攻 教授  
沼田 英治

わたしは1974年4月に理学部に入学し、大学院の修士課程、博士課程を経て1984年4月に大阪市立大学理学部に就職しました。2009年10月に今度は教授として京都大学に戻ってきました。25年半のインターバルを挟んで学生として10年、教授として11年半を京都大学で過ごしたことになります。

学部に入学した当時、本格的な大学紛争はすでに終わっていましたが、まだその余韻が残っていました。定期試験が学生のストライキによって流れたこともあります。教養部に所属していた2年間は、まさにモラトリアム期間で、学期中は麻雀に明け暮れ、夏と春の長期休暇は北海道を旅行していました。友人たちと夜を徹して議論をしたこともたびたびありました。それにもかかわらず1回生では60数単位を取得することができ、2回生はさらに暇になりました。クラブにも入らず、勉強もせずに、親しい異性もいないまま、本来ならば若さのあふれるはずの2年間で、これといったことをせずにだらだらと過ごしました。今から考えると不思議なくらいですが、人生でもっとも楽しかった2年間であり、生涯続く友人たちとの付き合いが始まったのもこの時期です。

こうして思い切り自由を満喫してから専門課程に入り、さあ勉強するぞと思ったのですが、わたしには、多くの先生方は研究にのみ興味を持っておられて学部学生を教育しようという熱意がまったくないように思えました。大学院に入らないとちゃんとした指導も受けられないし、好きな研究に全力を注ぐこともできないと思いました。ところが、当時の大学院入試の競争率は9倍近く、わたしからは優秀に見えた先輩たちも落ちたので、精神的にたいへんつらい2年間でした。それでも、3回生の後期に受けた日高敏隆先生の講義に刺激を受けて、自分がやりたい研究分野が見え、何とか大学院入試にも合格しました。

当時理学部生物では、課題研究（卒業研究）は4回生後期の半年だけで、本格的な研究は大学院に入ってからでした。日高先生の提案を受けて、アゲハの精子形成に関する課題に挑みました。最初は順調に進んだのですが、修士2回生の時に壁に突き当たりました。今から考えると、この課題にも発展性はあったのですが、本人がだめだと思い込んでいました。そこで、修士課程の終わりに先生と相談して、博士課程に進んだらカメムシの研究にテーマを変えることにしました。実は、研究を始める前に張り切って関連分野の論文をたくさん読みました。その結果、過去の論文と同じような結果が得られたら正解にたどり着いた気がしてしまい、違った結果が得られたら本当はそれが新しい発見なのに、それに気づかないようになっていました。



第16回国際昆虫学会議（1980年8月、京都）において、ベルギーのAnne Marie Leloupさんのポスターの前で撮影。  
左から、わたし、田川純さん（実験の基本を直接教えていただいた研究室の先輩、後に岡山理科大学教授）、Leloupさん、日高敏隆先生。

博士課程1回生の夏に、京都で第16回国際昆虫学会議が開催されました。この会議は4年に1回（夏の）オリンピックと同年に開催されるもので、昆虫学者にとってのオリンピックのようなものです。このアジアで初めて開催された国際昆虫学会議では、論文で名前だけを知っていた著名な海外の研究者たちが宝ヶ池の京都国際会館に集結しました。わたしは、ようやくカメムシの研究を始めたところで、虫の世話をするために学会期間中毎日大学と宝ヶ池を往復しました。自分のアゲハの成果に自信がなかったわたしは、講演申し込みの締め切り日にも、まだ申し込んでいないのがばれないように静かにしていました。ところが、先生から「もうアブストラクトは送ったの？」と尋ねられ、やむなく急いで申し込みました。このように渋々だったのですが、発表すると決まると時間をかけて準備をし、何度も練習をしてから修士課程で行ったアゲハの研究結果を発表しました。おかげで、自分でも

うまく発表できたと思います。そして、昆虫の精子形成の権威であった座長のEdwin Marksさんをはじめ、外国人研究者からたくさん質問を受けました。しかし、英語の聴き取り能力が低かった上、緊張していて、質問にほとんど答えることができませんでした。質疑応答の時間がとても長く感じられました。しかし、自分が壁にあたって放棄しようとしていた研究の結果にたくさん質問が出たことには、とても勇気づけられました。そのことで気をよくして、それからカメムシの研究に没頭しました。先生から「今度はカメムシのバイオロジーを一からやりなさい」と言われ、机上の勉強ばかりが先行しなかったのがよかったのか、比較的順調に進みました。そして博士課程に4年間、すなわち1年間余分に在学したところで、幸運にも大阪市立大学の助手に採用されました。

後に2008年から2016年までわたしは国際昆虫学会議の評議員を務めました。評議員退任後、第27回国際昆虫学会議を日本に招致する委員会の委員長を務めました。そして、再び国際昆虫学会議が宝ヶ池の京都国際会館で開催されることが決まりました。研究生活の最後に、わたしが国際舞台にデビューしたのと同じ学会を再び同じ場所に招くことができるととてもうれしく思います。きっと当時のわたしのように刺激を受ける若者が出てくるに違いありません。

大阪市立大学に就職してからは、自分で実験し、研究することよりも、むしろ大学院生の研究指導をすることが楽しくなってきました。就職してから9年後に、わたしを採用してくれた教授の佃弘子先生が退職され、わたしは助手のまま研究室の代表者になりました。そして、講師、助教授、教授となって、だんだん研究と教育だけではなく、大学の運営にも関わるようになっていきました。そして、さらに大学の運営の仕事が増えながら定年まで大阪市立大学にいたろうと思っていた矢先に、縁があって母校の京都大学に教授として戻りました。離れてから四半世紀もたっていたので、何もかもが変わっていると予想していましたが、いざ戻ってみると、大学の雰囲気も変わっておらず、かつて利用した百万遍界隈の飲食店なども残っていたことに驚きました。



わたしが大会会長として開催した第23回日本時間生物学会学術大会（2017年10月、京都）に、基調講演者として招聘したBarbara Helmさん（Glasgow大学）と、大会終了後深泥池にて撮影。Helmさんとは「概年リズム」という共通の課題に興味をもっており、以前から交流があった。

しかし、今度は学生ではなく教員として勤めるわけで立場がまったく違います。わたしの学生時代のように学生をほったらかしにする教員はほとんどいなくなっていました。そして、学生気質も少し変わったように思いました。

わたしが学部の3回生の時に、当時あった理学部附属大津臨湖実験所に1週間泊まり込む陸水生物学実習を受けました。前半は決まった答えのある課題をこなすふつうの実習で、後半は決まった答えのない課題に数人のグループで挑戦するミニ課題研究のようなものでした。わたしたちは、前半は授業時間が終わるとすぐにかたづけて、トランプや雑談をして遊んでいましたが、後半は夜の12時頃まで実験、観察をしたり、結果の解釈を侃々諤々と議論したりして、最終日に口頭発表し、レポートにまとめました。このように、かつての京大生は指示されることを嫌い自分で考えて実行することが好きでした。

しかし、教員として戻って来た時には、こちらからやるべきことやそれをこなすタイムスケジュールを指示したほうが能力を発揮できる学生が増えていました。講義の出席率はかつてよりずっと高くなっていましたが、自分から質問をする学生は減っていました。相変わらず自由な京都大学ですが、多くの学生たちはその自由を持って余しているように見えました。今度はわたしが教員として、どうすればよいのか思い悩む番でした。そこで、講義や課題研究の指導などでは、いろいろと工夫を試みました。初めのうちはなかなかわたしの意思が通じないようでしたが、徐々に効果が表れ、京大生を教育するのが楽しくなってきました。これからは、京都大学には自由な伝統を守ってもらいたいし、個性的な若者を伸ばしていただきたいと思います。その一方で、「自由の海でおぼれる学生」を作らないことが、大きな課題だと思います。

わたしは、どうしても達成したい目標や研究したい特定の課題があつて研究を続けてきたわけではありません。それでも、高い評価を受けるためにはこういう研究をするべきだとか、研究費を十分受けるにはこういう研究をしたほうがよいなどと考えて研究の方向を変えたことは一度もなく、その時、その時に知りたいと思ったことだけを研究して、無事定年を迎えることができました。知らないことを自分の手で明らかにすることは、若い頃も今も血沸き肉躍ります。歌を歌ったり、踊りを踊ったり、きれいな景色を見て感動するのと同様に、知らないことを知ろうとすることもヒトという生物の本質だと思います。それに挑み続けられた、こんなに楽しい人生は他にありません。それを可能にしてくれた、母校であり、教員としても受け入れてくれた京都大学に心から感謝したいと思います。

## 格物致知

京大生協教職員委員会委員長 今山 稲子

かなり前のお話になりますが、本学のある教員の講演を拝聴に大阪まで出向いたことがあります。世の中が産学協（共）同なり連携なりと声高に叫ばれるようになった頃のことです。講演も終盤に「研究するということは人類の知恵が一つ増えるため、不思議の扉を一つ開くために我々は研究するのだ」という言葉にひどく心うたれ、感銘したことがありました。

格物致知、知を致すは物を格すにあり、物事の道理や本質を深く追求し理解して、知識や学問を深め得ることだそうです。今回この特別号の編集にあたり、先生方から寄せられた原稿を拝読しつつ、こんな言葉が浮かびました。

2020年年明けより今に至るまでコロナウイルス感染拡大防止対策のために始まったリモート授業等、学生はもちろんのこと教職員の皆さまも予期せぬ社会の変容に追いまくられた一年となったと思います。出口が明らかにならないままにまた春は巡り来て往く人、来る人、花もほころぶ時期を迎えつつあります。開かれた不思議の扉から人類の英知がウイルスに打ち勝つ日を願いつつ、疲弊した社会生活の復興、そして皆さまのご多幸をお祈り申し上げます。



カット：日高 喜久子

# コロナ禍の生協の取り組み紹介

2020年度はほとんどの講義がオンラインとなったことで学生の登校が大幅に減少し、その結果、京大生協の経営状況は大変厳しい状況に陥っています。京大生協は組合員の生活を支えるために基本食堂や購買の営業を続けてまいりましたが、どのような取り組みをしてきたのか、また、どうして現在の営業形態になっているのかについて、そしてこれからどのような取り組みをしていくのか、少しでも多くの教職員組合員の皆様に知っていただきたく、お伝えしていきたいと思っております。

## 新型コロナウイルス感染症の拡大防止の取り組み

現在、食堂のテーブルには飛沫感染防止のためにアクリルパネルを設置しております。街中の飲食店ではよく見かけるようになりました。教職員の皆様は、時差利用がしにくいと思っております。生協食堂でも、教職員の皆様が安心して食堂を利用できるように、各テーブルに設置しております。



中央食堂ホールの様子



南部食堂ホールの様子



中央食堂 出食カウンターの仕切りボード



吉田ショップ カウンターのビニールカーテン

食堂・購買どちらも、利用者と職員の飛沫感染を防ぐためにカウンターに仕切りボードやビニールカーテンを設置しております。もちろん、生協職員もマスクを着用しておりますので、安心してお声かけください。職員も利用者の皆様もお互いがマスクを着用しており、仕切りがあるため、声が聞き取りにくくなります。少しでも、大きめの声でお声かけください。

また、レジでは、利用者と職員の飛沫感染を避けるためビニールカーテンを設置しております。接触を可能な限り減らすため、ご利用は電子マネーをお願いいたします。現金でのお支払いや不足分のチャージをする際には、コイントレーをご利用下さい。また、注文時やお会計の際には、間隔を空けてお並びください。



中央食堂 レジの仕切りボード



時計台ショップ レジのビニールカーテン



吉田ショップ レジの間隔をあけて並んでもらうサイン

## 生協の取扱商品の変化について

現在生協食堂で提供しているメニューは、かつてほどバラエティ豊かなラインナップの提供ができておりません。また、購買でも、取り扱う事のできる商品が減ってきています。



### ①<食堂>適温提供と品切れ防止

例えば10種類のメニューを提供する場合、利用者が選べるよう10種類全て用意しておきます。しかし、選んでもらえず時間が経ってしまうと、冷めてしまったりします。

利用が減少している現状では、これまでと同じ種類の商品を適温提供しようとする、1種類当たりのストック数を減らして管理しなくてはならず、品切れ、調理中、という事が非常に発生しやすくなります。「品切れ防止」と「適温提供」を両立させるために、種類を絞って提供をしております。

人気のメニューが揃っていたとしても、種類が減っていて「メニューが減った」「食べるものがない」と感じてしまうのは当然だと思いますが、その分「温度」を感じていただきながらご利用いただけたら幸いです。

### ②<食堂><購買>食品ロスの削減

食堂では、調理済みの商品を温め直すなどして提供するわけにはいきません。購買でも、消費期限を迎えた商品を販売するわけにはいかないので、廃棄することになります。

食堂では、提供しているメニュー種類が多いと、調理しておいても時間が経って冷めてしまったり、煮崩れしてしまったりして、提供できない状態になりますし、購買では、仕入れたけれども利用してもらえなかったら、食品ロスが増えます。

食品ロスは世界中で取り組まなければならない問題です。利用者が減っている中で少しでも食品ロスを減らすため、食堂ではメニューの種類を減らして管理の精度を上げる、購買では、利用していただけるギリギリの数量を仕入れているのも一つの要因です。食品ロスの削減のため、ご理解いただけましたら幸いです。



### ③<食堂><購買>大学生協全体での仕入れ

生協食堂で使用している食材や、購買で仕入れを行う商品は、全国の大学生協で共有しています。他の大学生協でも同じメニューが食堂で提供されています。

通常、商品や食材は、発注してからすぐに店舗に納品できるよう、物流倉庫で保管しているのですが、学生の登校がほとんどなくなり生協の利用が減った状態では、商品や食材の出荷限界が到来し、ここでも食品ロスが発生してしまいます。そのため、倉庫で保管する量を減らさなくてはなりません。利用が少ない状態では、メーカーなどから少量・多品目の仕入れをすることになり、これまでのような条件で商品を卸してもらえず、結果として調達コストが増加してしまうという悪循環に陥ってしまいます。そのため、どこの大学生協でも価格を維持できるよう、食材や商品を限定しています。

現在では大分改善してきましたが、それでもまだまだ、かつてのようには戻っていません。



中央食堂 メニューボード



吉田ショップ 商品を減らしている棚

## 購買の取り扱い商品の変化

購買でも、これまでとは少し異なった商品を取り扱うようになりました。例えば、今ではとても身近になった、手指の消毒液です。詰め替え用のものもあります。

また、マスクの需要も非常に高まりました。新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた当初はなかなか仕入れることができませんでしたが、今では購買店舗でも常備しております。大量に入っているマスク・機能性マスク・快適性マスク…など、多くの種類のマスクをご用意しています。

街中のコンビニエンスストアでは、約2割の方がマスク非着用のまま来店しているというニュースもありました。新型コロナウイルス感染症は、誰かが頑張って対策をするものではなく、みんなで少しずつ配慮しながら取り組めば、きっと感染拡大は防げるはずです。

従来は上記のような商品の専用の棚・コーナーはありませんでしたが、現在では専用コーナーを設ける程になってきています。必要な時にはぜひ生協購買でお買い求めください。校費でのまとめ利用なども承っております。



時計台ショップ 消毒液コーナー



時計台ショップ マスクの陳列棚



吉田ショップ コロナ対策の陳列棚

## 食堂メニューの提供スタイルが一部の店舗・時間帯で変わります！

現状の種類で1週間同じメニューを提供していると「同じメニューばかり」「食べるものがない」と感じてしまうのは当然だと思います。そこで生協食堂では、メニューの提供方法をこれまでと変更して営業いたします。

中央食堂・吉田食堂、南部食堂、宇治食堂では、昼食営業で日替わりメニューの導入をします。定番のメニューや人気のメニューの提供を維持しつつ、日々のご利用でも飽きがないよう、数種類のメニューを日替わりで提供します。

そして中央食堂では夜の営業を再開するとともに、中央食堂、宇治食堂、桂食堂の夜営業では定食スタイルでの提供を始めます。

また、カンフォーラの営業を再開いたします。これまでのようなディナー営業はまだ再開できませんが、ランチの営業から再開します。



今は閉店しているカンフォーラ

## 最後に

生協が以前のような姿に戻るためには、組合員の皆様のご利用が不可欠です。一方で、利用が少ないことを理由にして、組合員の皆様に不便を押し付けるわけにもいきません。

京大生協では、上記の通り工夫や試行錯誤を繰り返し・積み重ねながら、教職員組合員の皆様に日々ご利用いただけるよう、努力してまいりますので、今後とも京大生協のご利用をどうかよろしくお願いいたします。

## 人類と動物の共生の物語を探る フィールドワーク



京都大学 白眉センター 野生動物研究センター 特定准教授  
相馬 拓也

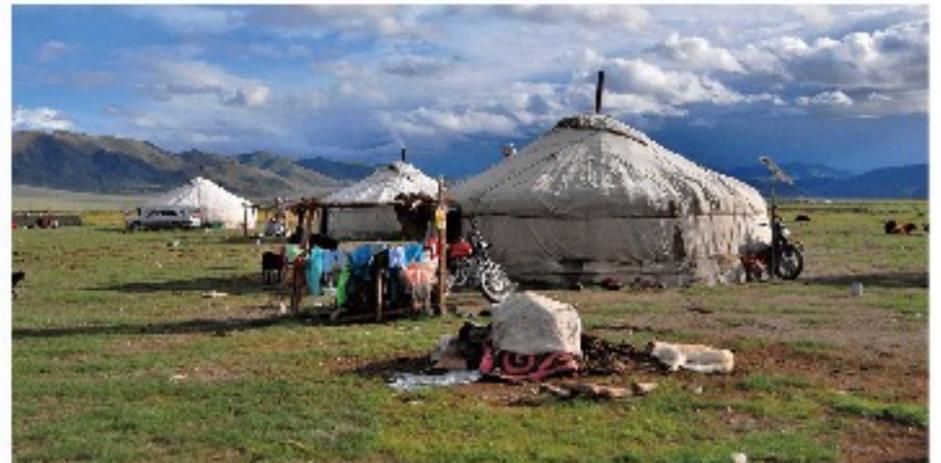


### 遊牧民とフィールド研究者としての原点

フィールド研究者としての私の原点は、大学院生のときにモンゴルで遊牧民と一緒に暮らした2年間の経験にあります。場所はアルタイ山脈の奥地のカザフ遊牧民の村です。もちろん、ケータイの電波は届きませんし、電気がないのでカメラも充電できない。そのため、2~3週間に1度は充電や買出しのために街に戻る、という生活でした。遊牧民研究の一番の動機は、「なぜ、どうやって、どうして、こんな辛い所で暮らしているのか？」という素朴な疑問でした。草原の暮らしは本当に楽ではありません。植生も乏しくて、極度の乾燥から農業も難しい。短い夏を過ぎれば、気温-40度にまで下がる冬が一年の1/3を占めます。



遊牧民と2年間を共にした家（右：夏の天幕、左：冬の家屋）



わたしのフィールドとした、モンゴル最西端のバヤン・ウルギー県という場所は、首都から1,500キロも離れています。初めて行ったときは、ぎゅうぎゅう詰めな乗り合いバスに押し込まれ、舗装されていない道を60時間走りどおし…これは辛かったです（笑）。モンゴルで調査中に、「西の果てには、イヌワシを手なずける連中がいる…」という話を耳にして、確かめに行ったのが最初の訪問でした。生活文化としていまでもイヌワシを手なずける習慣は、アルタイ山脈のカザフ遊牧民の社会にしか見られません。その美しくも、過酷な大地に力強く根を張る人々の文化に魅せられ、イーグルハンターの一家と暮らして、その知と技法を研究しました。

彼らは遊牧民なので、季節ごとに移動をします。フィールドワークしていても、去年と同じ場所に同じ人がいるとは限



カザフ鷹使いの古老

りません。探すときは放牧中の牧夫に声をかけて、「〇〇の△△さんはどこ行った〜？」と聞くしかない。毎日毎日、遊牧民の所に歩いて行って情報収集をします。「イーグルハンター知ってますか？」「物知りなおじいちゃんいますか？」と、とにかく足で稼ぎます。そうしているうちに「そこまで言うなら、一緒に住んでいいよ」という家族が見つかって、そんな人たちと一緒に暮らしました。生活はもちろん、食べるものも寝る場所も一緒です。フィールドでの仕事とは、手がかりがゼロからのドラクエみたいな世界なんです（笑）。

現地の暮らしでは、とくに言葉には苦労しました。カザフ人が住むバヤン・ウルギー県は、カザフ人の社会なので、モンゴル語や英語は全然通じません。現地家族と一緒に暮らす中で、覚えるしかありませんでした。カザフ語のテキストも何もなかったので、モノに付箋を貼って単語を覚えめました。幸いモンゴル語と文法や語順が似ているので、会話を推測しながらコミュニケーションを取っていました。

遊牧民と暮らしていると、オオカミが家畜を狙いに来ます。雨の日の夜、家の人々が飛び起きて、斧とか銃とか持っていきなり出ていくと、車の下でオオカミが雨宿りしていた事も。文学やアニメ作品などでは、オオカミは狡猾で頭と



フィールドワークでイヌワシ測定中の筆者



捕らえられた仔オオカミ（食用とされる）

口の大きさが強調されて描かれますが、あれは本当な

んです。一晩中でも駆け回る体力があるので、狙われたらまず助かりません。ときにオオカミは、家畜の群れを次々に狩る「サープラスキリング」という習性を表し、一晩で数百頭のヒツジが犠牲となることもあります。そんな憎まれ者のオオカミですが、チンギスハンの先祖は「青き狼と白き牝鹿」と言われ、古代遊牧民の烏孫では、オオカミに育てられた子の末裔という創世神話があるなど、遊牧民はオオカミを崇拝し、民族の誇りの一部にもなっています。

わたしの研究の最大のリサーチクエストとは、まさに「人類の底力」そして「サバイバビリティ」の探求にあります。人間は地域の動物や植物を資源として巧みに利用し、地球の全域を生活の場と変えました。人類が環境に適応する過程で、どのように動物を利用し、そして動物もヒトを利用したのか？そのテーマは世界中にあり、興味関心が尽きることはありません。

## フィールドワークへの想いと臨地教育

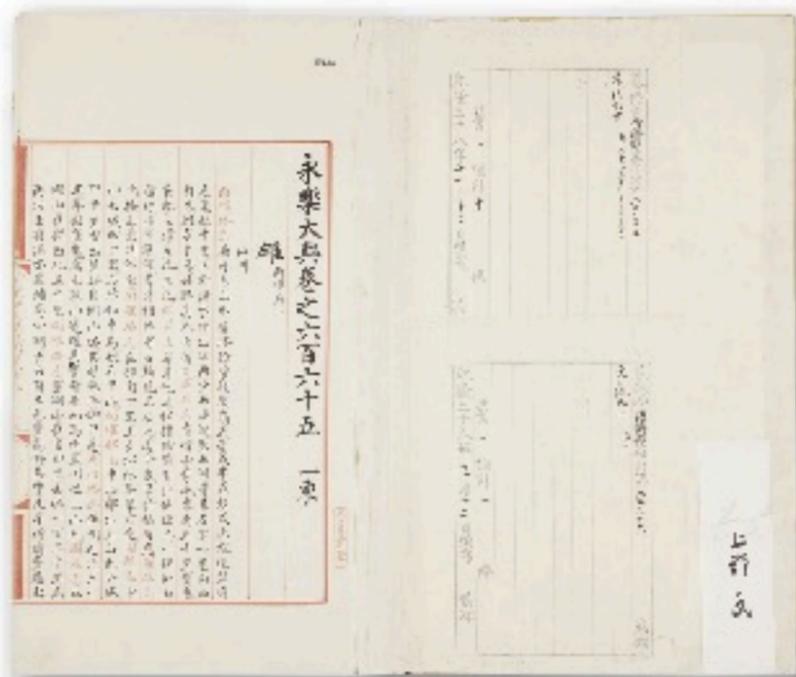
フィールドワークの醍醐味とは、自分自身が現地に赴いて、目で見て、肌で感じて、人と話して、聞いて触れて、という五感を駆使することにあります。現地の人々と生活を共にすることで、彼らの「異文化」だったものが自分の中に芽生え、自分の一部「自文化」になっていく…そういう感覚があるんです。そうした肉感的な記憶は、どれだけデジタル化やIoT化が進んでも、フィールドワークでしか得られない感覚だと思います。

コロナが終息した世界では、若い人たちにはもっと海外に目を向けてほしい。フィールドワークを通じた学生の育成に、残りの研究者人生を費やしていきたいと思っています。学生が「行きたい！」って言ったら、お金とかは何とかしてあげるから、現地にポイッと投入みたいな感じで（笑）。それが一番、サバイバビリティ能力を磨くいい機会なんです。まず言葉が話せないでご飯すら食べられませんからね。

問題解決は自分の能力を最大限使って取り組むもので、会社の仕事でもフィールドワークでも、じつは大差はありません。独自の問題解決能力が身に付けば、基本的にはどんな分野にも参与できる人材になれます。フィールドワークとは、その下地作りになると信じています。研究と、教育現場と、実社会をつなぎ合わせて人格陶冶と個を育成するヒューマン・ディベロップメントこそが、フィールドワーク教育の貢献だと思っています。

## 京都大学人文科学研究所附属 東アジア人文情報学研究センター 閲覧室

蔵書は主に中国を中心とした東アジアの文献を保有しており、中国に関わる図書は世界でも有数の質・量を誇っています。



### ＜永楽大典＞

明代に永楽帝の命によって編纂された類書（百科全書）。全22,877巻・目録60巻・11,095冊。写本でのみ伝わり、現在は800巻ほどしか伝存していない。



### ＜西夏文華嚴經＞

党項姜（タングートきょう）族の建てた西夏で創作された西夏文字で印刷された「大方広佛華嚴經」。

### 完全閉架式で運用しています。

他の図書館・図書室とは、運用・利用方法が少し異なるのが特徴です。職員が出納をおこなう閉架式です。閲覧室内での閲覧のみで、貸し出しや館外への一時持ち出しはおこなっていません。

糸綴じ（線装本）の典籍も多く、取り扱いには注意が必要で、保全をはかるため、文献複写は利用者ではなく職員が行います。

### 多数のデータベース

**全国漢籍データベース**

日本国語学研究所

氏名

姓

山名

一冊

keyword

京都大学学内のデータベース「Kuline」に加えて「全国漢籍データベース」があります。「Kuline」では「所蔵館＞人情セ」、「全国漢籍データベース」では「京大人文研 東方」でセンターで運用する蔵書が検索できます。

地図や拓本など図書以外の資料などもデータベース化されており、利用者は調べるものに応じてデータベースを使い分ける必要があります。

上記の＜永楽大典＞と＜西夏文華嚴經＞は、どちらも京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センターの「東方学デジタル図書館」に全文の画像があります。

## 📖 利用にあたって予約をお願いします。

閲覧利用の際には、予め予約が必要です。新型コロナウイルス感染症対策のため、閲覧室は座席の間引きを行っております。

予約はTELのみとなっておりますので、ご利用の際には必ず事前にご連絡をお願いします。



## お問い合わせ先

- <開室日> 月曜～金曜 ※休館日など、詳細はホームページでご確認ください。  
<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>
- <開館時間> 9:30 ～ 12:00 ・ 13:00 ～ 16:30
- <閲覧受付> 16:00まで
- <TEL> 075-753-6990

## 京大俳句会からのお知らせ

コロナ禍先行き不透明につき、引き続きブログ上での句会とし、下記の通り案内します。奮って、投稿をお願いします。

### 記

<3月度>145回 2021年3月27日(土)  
<締切り>2021年3月25日(木)午後8時 厳守  
<兼題>「旅」

投句数：2句、うち1句は自由詠、1句は兼題(課題詠)とします。  
投稿先：京大俳句会 無料  
メール [t0103t@gmail.com](mailto:t0103t@gmail.com)  
Fax 072-848-7518

以上、詳しくはブログ「京大俳句会自由船」にて案内しています。  
過去の作品は各月同ブログで鑑賞できます。

なお、4月以降については、投句締切が各月第4木曜日午後8時です。兼題が未定の場合は自由詠2句とします。

### 前回 143回作品

よるのうめ をんなのこひの といきてふ	幸男
やさしさの井戸水へ風花ななめ	幸夫
歩み止め肩に風花気やわらぐ	明美

### 編集後記

お忙しい中にお時間を割いてご寄稿をいただいた皆様、本当にありがとうございました。とりわけ今年は、京大生協の前理事長・前副理事長に揃ってご寄稿をいただいた、記念すべき号となりました。そして、ご退職される教職員の皆様、長年のお仕事、本当にお疲れ様でございました。また、ご在職中の京大生協のご利用・ご支持、本当にありがとうございました。

新型コロナウイルス感染症によって、社会の在り方や価値観は大きく変化しましたが、こんな世の中だからこそ「人と人のつながり」を大切に、コミュニケーションを取っていく事が「人」の原動力になるのではないかと思います。本年度はコロナ禍によって多くのコミュニケーションが分断されてしまいましたが、大学生協が、学生や教職員、組合員の皆様に「つなぎとめる」「結び付ける」接点になっていけたらと思っております。

あらためまして、これまでのご利用に感謝するとともに、これからの新たな生活が一層充実したものとなる事を祈念しております。

(関野博之生)

京都大学生協同組合(Kyoto University CO-OP)本部 (教職員情報に関するお問い合わせは、メール [info@s-coop.net](mailto:info@s-coop.net))  
〒606-8316 京都府京都市左京区吉田二本松町 TEL:075-753-7640 FAX:075-761-0046

特別号  
格物致知



外務省所管の東方文化学院京都研究所として、武田五一氏と東畑謙三氏の設計により1930年に建築されました。登録有形文化財にも登録されているこの建物は、名称からは想像できないような西洋風建築で、キャンパス内ではなく閑静な住宅街の中にあることも相まって、その佇まいは荘厳の一言に尽きます。（関係者以外は、敷地内立ち入り禁止です）

残しておきたいキャンパス風景 第二十一回  
「京都大学人文科学研究所附属  
東アジア人文情報学研究所センター」

## 出資金返還・ 組合員資格 更新のご案内

京都大学を離れられる組合員の方は、  
京大生協の脱退手続きが必要です。

お預かりしている出資金を返金いたします。



引き続き当生協の利用を希望される場合、  
「退職教職員」として組合員資格を継続する  
ことが可能です。（当生協約款第6条に基く）

階層変更手続きが必要です。手続きは各購買  
店舗にて承ります。生協組合員証（組合員証  
番号がわかるもの）をご持参ください。



西部会館ルネ (外線) 752-1587 (内線) 7632	吉田ショップ 752-1587 7632	北部購買 753-7633 7633	南部生協会館 752-1586 7635	時計台生協ショップ 753-7630 7630	時計台旅行センター 771-6289 7639	宇治生協会館 0774-38-4388 17-4388	桂ショップ 383-7300 15-7300
ブックセンタールネ 771-7336 7631	洋書 751-6183 7631	PCセンタールネ 753-7636 7636	コンベンション サービスセンター 753-7655 7655				